

=====

## CONTENTS

- 巻頭言 「73 回大会に向けて」
- 第 73 回全国学術大会のご案内
- 近藤邦康先生を偲ぶ
- 田中仁先生を偲ぶ
- 事務報告
  - 2022 ～ 23 年度第 3 回常任理事会議事録
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書

=====

## ■ 巻頭言

## 73 回大会に向けて

濱田麻矢（神戸大学）

いきなりやってきたパンデミックに「来年になれば」「次の学期からは」「次回こそ」と励ましあいながら教育研究活動を続けてきました。現代中国学会の場合、「いつも通り」の全国大会が開かれたのは 2019 年の関西学院大学主催が最後でした。四年ぶり、学部生ならば新入生がもう卒業するという時間が流れ、2023 年になってようやく対面でみなさんをお迎えできることになりました。神戸でお待ちしております。

パンデミックがもう少し早く去っていたら（たとえば一年ですんでいたら）、対面の再開は欣喜雀躍で歓迎されたことでしょう。しかし四年という時間の中で急速にリモートワークの形態が進化し、学びを止めまいというあれこれの努力が続けられた結果、私たちの行動様式は根本的に変化してしまっただけです。現在疫禍は（表面上）沈静化し、大学の警戒レベルがゼロになりました。しかし本学の場合、アクセスポイントは設営されたままですし、配慮が必要な学生は自宅からリモートで受講することが認められています。多くの会議はオンライン開催がデフォルトになりました。この流れは、疫禍が本当に過ぎ去っても変わらないでしょう。

学会活動は私たちの研究生活に必須の一環ですが、所属大学によって定められたオブリゲーションでもなければ自分の学生を直接指導する場でもありません。自分の意志で入会し、オープンな場で研究成果を発表し、さらに忌憚ない討論をするのが学術大会の意味だと言えます。

さて、この活動のなかで「対面でなければならぬ」要素はどこにあるのでしょうか。発表する側にとっては、対面で聴衆の反応を感じたいというのは大きいでしょう。モニタに並ぶ黒い四角に向かって一方的に話しかけるのはときに虚しいものです。聞き手が会議システムに繋いでいるからといって、こちらの話聞いてくれているとは限りません。また、聞いている方にとっては、

質問がしにくいということが考えられます。対面学会でも、わざわざ挙手して質問するまでもない些細な感想を休憩時間に廊下で伝えにいくというのはよくあることです。対面学会の重要性はこの「廊下／休憩時間」に集約できるかもしれません。久闊を叙したり、原稿の依頼をしたり、記念撮影をしたり、会議のあと飲みに行く約束をしたり……。次回の神戸の大会でも、ぜひこうした血肉の通った交流を楽しんでいただきたいと思います。

一方で、この四年間でオンライン会議のメリットを知ってしまった私たちが、本当に対面会議「だけ」に戻っていいのかという疑問も残ります。移動するにはお金と時間がかかりますが、オンラインなら海外からでも視聴できます。家庭や健康の事情で学術大会参加は諦めていた会員が、オンラインだったから参加できたということもあったでしょう。スライドなどの資料は、対面よりもオンラインのほうが見やすいことが多いし、ネットに繋いでいれば資料の受け渡しも簡単に行えます。

いいとこどりのハイブリッド開催が行えるかどうか、それが今後の課題です。神戸大会でも検討しましたが、開催会場が広いわりに設備が貧弱なこと、主催者の経験が不足していて運営に自信がないこと（学内の会議でもよく失敗していること）から対面に集中することにさせていただきました。

さて、シミュレーションの段階でわかったのは、こうした主催者側の事情以上に、運営費の徴収が大きな問題だということです。議論の詳細は省きますが、関西事務局をはじめいろいろな委員の意見をうかがってたどり着いた結論は、今回の大会では現金で参加費／懇親会費／弁当代をいただくしかないということでした（ぜひお釣りのないように準備をお願いします）。となると、遠隔の参加者からは現金書留で徴収するしかありません。この点についてはぜひ今後検討し、自宅を離れるのが難しい会員はオンラインで参加できるインクルーシブな大会に改善していけたらと考えています。

## ■ 第 73 回全国学術大会のご案内

会員各位

2023 年の日本現代中国学会全国学術大会は、10 月 14 日（土）と 15 日（日）の両日、神戸大学人文学研究科との共同主催で神戸大学六甲台第 2 キャンパス瀧川記念学術交流会館（1 日目）および人文学研究科 A、C 棟（2 日目）において対面のみで開催されます。

今年の共通論題のテーマは「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」です。

### 大会プログラム

2023 年 10 月 14 日（土）共通論題・懇親会

12:00 ～	受付（瀧川記念学術交流会館一階）
13:00 ～ 18:00	共通論題：「現代中国語圏におけるジェンダー規範の変遷」（瀧川記念学術交流会館大会議室）
19:00 ～	懇親会（瀧川記念学術交流会館一階ホール）

## 2023年10月15日(日)自由論題・分科会

9:00～	受付	
10:00～12:00	自由論題1：経済・社会	自由論題2：文学・宗教
13:00～15:00	自由論題3：歴史	自由論題4：文化
15:15～17:15	分科会「建国初期の中国社会的再構築」	自由論題5：ジェンダー

### 共通論題のプログラム

日程：2023年10月14日(土)共通論題・懇親会

開催時間 第1部 13:00-15:15、第2部 15:30-18:00

場所：神戸大学(文学部)

開催方式：対面のみ(ただし、新型コロナウイルスの流行状況により、オンライン開催となる可能性がある)

### 共通論題次第

#### 司会・趣旨説明

13:00～13:10 濱田麻矢(神戸大学)

### 共通論題趣旨

ジェンダーの問題は誰にとっても他人事ではないはずですが、核心的な議題として学際的な場で論じられることはなかなかありませんでした。しかし現在、ジェンダー規範それ自体に向かいあうことの重要性が今までになく認識されるようになっていきます。

2017年に米国を揺るがせた #metoo 運動は東アジアにも波及し、中国や日本を含む各国でセクシャルハラスメントへの告発が行われるようになったことはまだ記憶に新しいものがあります。性的少数者への差別、同性婚合法化を含む婚姻の多様化、雇用や教育格差への対処、根強く残る売買婚などなど、既成のジェンダー規範に端を発する問題は枚挙にいとまありません。ジェンダー規範とは、ときには政治のあり方、国家そのもののあり方を問う大きなイシューになりうることは、現在の日本でもリアルに感じられるところです。

今回は、中国語圏が現代化を進める過程で、ジェンダー規範がどのように変化したのか、法律、経済、文学、文化四つの角度から検討します。諸会員それぞれの研究分野にジェンダー規範の問題を重ねてみると、また違った視野が広がるかもしれません。ぜひ多くの方の、積極的な参加をお願いいたします。

### 第1部 報告次第：

13:10～13:40 星野幸代(名古屋大学)

13:40～14:10 小笠原淳(熊本学園大学)

14:10～14:40 大橋史恵(お茶の水女子大学)

14:40～15:10 鈴木賢(明治大学)

## 報告要旨

### 踊る女性へのまなざし—革命バレエ表象におけるエロティックな欲望

星野幸代（名古屋大学）

「舞踊とジェンダー」をキーワードとした場合、(1)封建制、フェミニズム、ジェンダー等を主題とする舞踊の表現。(2)芸術と女性身体の消費の問題。(3)踊る男性、踊る女性に対するステレオタイプ。(4)社会における舞踊の機能・利用・影響のうち、ジェンダーと関わること、等の研究対象が考えられるだろう。本発表では「(2)(4)」を意識しつつ、文芸作品に現われた革命バレエの表象を対象とする。仮説としては、文化大革命期のバレエを踊る女性ダンサーという素材を採用した場合、女性作家の小説は、女性から女性身体への同性愛的な欲望という表現を開拓したのに対し、男性監督による映画はハリウッド的な女性身体へのフェティシズムを再生産する傾向があるのではないか。本発表ではこの仮説のもと、舞踊家と舞踊シーンが登場する巖歌苓と林白の小説、および映画『妻への旅路』（2014）、『芳華』（2017）の舞踊シーンを取り上げ、文革期のバレエ映画も照合しつつ検討したい。

### 文学テキストにおける中国女性の肖像—描く身体と描かれる身体

小笠原淳（熊本学園大学）

中国女性の身体は、古来より髪、化粧、服飾、纏足をめぐるセクシャリティや、結婚、出産といった生殖の要求によって規範化され、歪められてきた。現代文学のテキストに描かれる女性たちにも、伝統的なジェンダー規範をめぐる身体の葛藤が表象されている。

ヘルマン・シュミッツが身体を絶対的な場所において見出される現象と定義したように、身体と時空とは深いかわりをもっている。文学テキストにおいても、それぞれの時代と空間において異なる身体が表象されるが、彼女たちの身体は自己犠牲などの伝統的、受動的な女性観と近現代における行動主体への衝動のはざままで揺れつづけているところに一つの共通項を見出すことができる。本報告では、蕭紅、史鉄生、海男、余秀華、ケン・リュウなどの詩人及び作家の文学テキストに描かれた異なる時代の中国女性を、主体・客体としての身体から分析し、中国女性の肖像に文学研究の視点から迫っていききたい。

### 植民地期香港における中国系家事労働者の移動と生存

— 「ケア」と「クィア」の交差に着目して —

大橋史恵（お茶の水女子大学）

フェミニスト社会科学の領域では、経済のグローバル化の下で 1990 年代ごろから「移住労働の女性化」と呼ばれる現象が注目され、香港はフィリピンやインドネシアの移住家事労働者を多く受け入れている都市として知られるようになった。しかしフィリピン女性たちの受け入れが始まる 1970 年代より前から、香港のケア・エコノミーが移住女性たちによって支えられてきたという事実が目向けられることはほとんどない。これに対して人文学領域では、珠江デルタにおける近代製糸産業の発展のなかで経済的に自立し生涯非婚を誓って女同士で暮らした「自梳女」たちの少なからぬ数が、1920 年代から 30 年代にかけて香港や東南アジアへと移動し、住み込みの家事労働者として働いていたことが知られている。本報告では、この二つの異なる研究領域における「ケア」と「クィア」という関心を交差させながら、植民地期香港における移住家事労働

働者の存在をとらえなおしていく。とりわけ 1950 年代から 60 年代にかけて、「自梳女」たちが女同士の共同性をどう保持したのか、また老後の身の処し方をどう考えていたのかを、さまざまな資料の検討を通じて考察してみたい。

## 中台における『性別』規範の変容

鈴木賢（明治大学）

台湾では 2000 年代以降、性別平等が生理的な男女（両性、sex）の平等を超えて、性的指向、性自認、性的特徴などを含む多義語へと拡張し、それが法にも反映されるようになった。具体的には、性別平等教育法（2004 年）、性別就業平等法（2008 年）、同性婚法（2019 年）、そして現在、起草が進む包括的差別禁止法（平等法）といった諸法である。憲法法廷の判決では宗族集団の財産の継承権を男子にしか与えていない法規定を一部違憲とするなど（112 年憲判字第 1 号）、両性の平等についても一層の進展が見られる。この結果、台湾はアジアでもっともジェンダーギャップの小さい法域になっている。

他方、習近平体制下の中華人民共和国では中華の優秀な伝統文化、中華民族の伝統的な家庭美德の発揚といった言辞を以て、儒教的な性別規範、家族規範への回帰が顕著になっている。これは 2021 年から施行された民法典婚姻家庭編が、優良な家風の樹立、家庭の美德の弘揚、家庭文明建設の重視を唱い（1043 条）、離婚の自由を制限する離婚冷静期間（1077 条）を新設したことなどに表れている。

本報告では两岸における法に表れた性別規範の変容／不変容の実情を整理し、その背後でいかなる機制が働いているかを検討する。

参考文献 拙著『台湾同性婚法の誕生』（日本評論社、2022 年）、拙稿「LGBTQ+は中国でどう生きているのか」 兪敏浩編『中国のリアル』（晃洋書房、2023 年）。

15:15 ～ 15:30 休憩

## 第 2 部 討論

コメント

15:30 ～ 15:45 三須祐介（立命館大学）

15:45 ～ 16:00 石川照子（大妻女子大学）

16:00 ～ 18:00 全体ディスカッション

19:00 ～ 懇親会

## 自由論題プログラム

日程：2023 年 10 月 15（日）

開催時間：午前の部 10:00～12:00、午後の部① 13:00～15:00、午後の部② 15:15～17:15

場所：神戸大学（文学部）

午前の部 10:00～12:00

### 自由論題1 経済・社会

座長 中川涼司（立命館大学）

大西広（慶應義塾大学・名）

「中国ラオス鉄道開業1年余の事業成績と今後について」

許俊卿（大阪大学）

「中国におけるPM2.5問題を巡る市民の主体的な認知過程に関する実証研究  
—メディア報道とリスク認知の関連から読み解く—」

任泰然（立命館大学・院）

「中国の県域都市部における施設による高齢者介護サービス  
—吉林省の公主嶺市と舒蘭市の事例を中心に—」

### 自由論題2 文学・宗教

座長1 松浦恆雄（大阪公立大学・名）

高尚（神戸大学・院）

「乱世の恋と治世の恋—黄碧雲『盛世の恋』における張愛玲の影響—」

田中雄大（東京大学・院）

「施蛰存の詩学—情緒の発露としての新詩理解から『現代』的な詩作の肯定へ—」

座長2 石川照子（大妻女子大学）

佐藤千歳（北海商科大学）

「2000年代以降の中国社会における宗教意識および宗教実践の変動」

午後の部① 13:00～15:00

### 自由論題3 歴史

座長 高見澤磨（東京大学）

団陽子（日本学術振興会）

「対日戦後処理『中間賠償』と米華関係についての再考」

横山雄大（東京大学・院）

「1970年代末から1980年代前半にかけての中国漁船の日本近海進出」

石塚迅（山梨大学）

「中国と法治について対話ができた頃—中国湖南省の行政（法）改革2007-2011—」

### 自由論題4 文化

座長1 城山拓也（東北学院大学）

劉娟（横浜国立大学・非常勤講師）

「中国の絵本市場形成前における日本の絵本観の受容—『幼児読物研究』を中心に—」

方園園（神戸市外国語大学・院）

「木版画から漆芸へー沈福文の転身に関する歴史的検証ー」

座長 2 大橋史恵（お茶の水女子大学）

沈思遠（神戸大学・院）

「中国における出稼ぎ家事労働者の移動と生活ー労働者のライフストーリーを通じてー」

午後の部② 15:15～ 17:15

### 分科会「建国初期の中国社会の再構築」

司会者 角崎信也（一般財団法人霞山会）

報告者

鄭成（兵庫県立大学）

「建国初期の思想的統合への国民の受容について」

河野正（国士舘大学）

「1950年代河北省における共産党の人材育成と『浸透』」

杜崎群傑（中央大学）

「毛沢東の人民代表会議・人民代表大会観ー暴力と民主・警戒と協調の狭間でー」

討論者 上野正弥（神戸市外国語大学）、周俊（同志社大学）

### 自由論題5 ジェンダー

座長 神谷まり子（日本大学）

孫楚珮（神戸大学・院）

「1920年代における市民階級の女性想像ー『啼笑因縁』の関秀姑を中心にー」

何憶鶴（三重大学）

「『小資』の女性ジェンダー化現象に関する考察

ー1990年代中国の文芸領域における男性性のヘゲモニー闘争を背景としてー」

姜文浩（東京学芸大学・院）

「『十七年』時期の革命映画に見る女性像ー『中華女兒』と『不屈の人々』を中心にー」

■書籍販売 両日とも中国関係書店による書籍の出張販売を予定しています。是非ご利用ください。

### ■大会実行委員会からのご案内

1. 大会への出欠はウェブからの登録になります。入力の詳細は学会 HP をご覧ください。
2. キャンパスへの車両入構は制限されています。徒歩または公共交通期間をご利用ください。
3. 宿泊施設についてはご自身で早めにご予約ください。
4. 神戸大学構内は、決められた喫煙所以外は禁煙となっています。
5. 台風などで開催校が休講するような事態が発生した場合、開催の有無を朝 6 時の段階で学会のウェブサイトに掲載します。
6. 託児サービスの利用申し込みは1週間前までに菅原までご連絡ください。

関西大学 菅原 慶乃

E-mail:sugawara[ アットマーク ]kansai-u.ac.jp

## ■開催場所

神戸大学六甲台第2キャンパス

瀧川記念学術交流会館（1日目）、人文学研究科A、C棟（2日目）

（神戸市灘区六甲台町1-1）

## ■近藤邦康先生を偲ぶ

坂元ひろ子（一橋大学名誉教授）

日本現代中国学会の理事長を1994～1998年に務めた近藤邦康先生（東京大学名誉教授）が本年1月6日に亡くなられた。享年88歳（1934～2023年）。

近藤氏は名古屋の東海高等学校を卒業後、東京大学文学部中国文学科に進学、1957年卒業、同大学院人文科学研究科（中国語中国文学専攻）修士課程を修了した1959年から東京大学東洋文化研究所助手となり、1965年の学習院高等科教諭を経て、1966年、北海道大学助教授となり、1974年から東京大学社会科学研究所助教授、1982～1995年東京大学社会科学研究所教授を歴任された。ついで東大定年退職後の1995～2006年、大東文化大学法学部政治学科教授に就任された。

専門は中国近現代政治思想、その経歴からして、まごうことなきエリートといえ、しかも、父親は東大で中国哲学を修めた近藤康信氏（名古屋大学名誉教授、訳著『伝習録 新釈漢文大系13』明治書院、1961、著作『韓非子のことば：唯物的法治主義の国家論』黎明書房、1967等）、つまり二世学者で、邦康氏が中国哲学科ではなく中国文学科に進学されたのは、当時、倉石武四郎教授が中国（民国期）留学以降、「訓読批判」の立場にあり、「中国語による」中国文学研究を唱え、漢文訓読を本分とする当時の東大の中国哲学科とは異なる方向をとり、同大教養学部中国語教員の工藤篁氏もその影響下にあったことと関係したのであろう。

近藤邦康氏を偲ぶわたしといえ、家族で最初に大学に進学、第二外国語もドイツ語、その後も横道にそれ続けてばかりであったことからすると、普通に考えてこの立派な中国学エリートとの接点を見出すのはなかなか難しいというものであろう。

接点をもたらしたのはわたしの大学指導教官が西順蔵先生であったからにはほかならない。西氏は戦前、東京大学・大学院で中国哲学（当時は支那文学哲学科）を修め（宋学）、京城帝国大教授を経て帰国後はその前身時代（戦中は「東京産業大学予科」）から一橋大学で教鞭をとられ、当初、工藤篁氏とは同僚で（工藤氏は1950年に東大に転出）、親交があった。

近藤邦康氏によると、「一九五四年中国研究所で、西さんは「実践論」「矛盾論」の講義をされた。当時大学二年生であった私は、それを聴講して、その思索の深さに感心させられた」（近藤邦康「西順蔵の中国思想史研究——人倫、人格、人民——」木山英雄編『西順蔵 人と学問』西順蔵著作集別巻、内山書店、1995、116頁）という。

1957年に毛沢東の「人民内部矛盾」論が出ると、同年、現代中国学会大会で西氏はその報告



をし（『現代中国』 32号）、それを近藤氏は同時代的観察として価値が高く、毛沢東の社会主義建設の思想研究のための「礎石を築いた」（「西順蔵の中国思想史研究」 116頁）と高く評価する。つまりは中国学では多かれ少なかれ宋学を素養とした上で、1950年代の同時代の毛沢東を通して、戦後の深刻な「反思」期にあった西氏を対話相手として、近藤氏は氏の主要研究テーマを構築していかれたのであろう。それがのちには当時は「西が読みえなかった毛沢東の師楊昌済の論文や、青年期の毛沢東の論文を」（同上 120頁）読むことで自己の研究テーマを深めることにもつながったはずである。

かたや1970年代、文革終焉に近づくころから大学生として本格的に中国に目を向け始めたわたしとしては、そうした営為は理解できても、到底、共感しようもなかったのだが、今からすればその同時性への自覚については興味深く思える。

さて、そういう背景があり、西氏のもとで荘子や中国近代思想家たちについて学び、学部卒業後に数年、西氏もその編纂に関係されていた禅学大辞典（1987、大修館）の校正の仕事にわたしは従事、結局、その刊行後に大学院進学を考えた。西氏は一橋大を退職後だったので、1978年に東大中国哲学に進学したのだが、その時には、近藤氏はすでに北大から東京大学社会科学研究所に転任されていた。譚嗣同・章炳麟・李大釗を中心とする『中国近代思想史研究』（勁草書房、1981）もまとめられており、その後、中国哲学科での講義も始まる。わたしは博士課程に進学して1981~1983年には北京大学哲学系に留学、折しもその間、近藤氏も北京、そして上海を拠点として学術交流をされ、北京ではもとより、上海での受け入れ先、上海社会科学院歴史研究所にも同行して戊戌～辛亥革命期研究で名高い湯志鈞（当時、副所長）氏の知己を得て、おかげで上海の各図書館での調査研究に多いなる便宜を得ることとなった。

わたしが1983年秋に留学を終えて帰国して間もなく、同年11月には湯氏が学術交流のため来日され、東大では通訳の仕事が私にも回ってきた。講学におけるその高度な内容もさりながら、湯氏の強い江蘇なまりには難儀することになった。近藤氏と湯氏はその学術交流の成果を共著『中国近代の思想家』（岩波書店、1985）で発表された。

近藤氏は東大において中国哲学専攻の院生に演習を開講されるようになり、『民報』の章炳麟論文講読をされ、受講院生も試訳稿を提出、翻訳はのちに西順蔵（1984年に他界）・近藤邦康共編訳『章炳麟集 清末の民族革命思想』（1990、岩波文庫）として刊行され、章炳麟の文は仏教語を多用して難解なことから、国内はもちろんのこと、海外でも高く評価された。

中国哲学科での開講において、近藤氏は章炳麟のあとは主に毛沢東の師として知られる楊昌済の論文や、青年期の毛沢東の論文講読にあてられた。さらに授業とは別に、竹内好らが1957年に創めた中国近代思想史研究会を継ぐべく、1980年代後半ころから中国現代思想史研究会を主宰された。東大での研究会のあと、酒場での談論風発が常となり、海外からの学者を迎えることもあり、いつもは真面目一方の近藤氏も上機嫌だった。

そのうちに、近藤氏の主要研究テーマとなった毛沢東の思想について、「革命」の実践と「建設」の実践として跡付ける大部の『毛沢東 実践と思想』（2003、岩波書店）をまとめられた。長らく、西氏と近藤氏の研究に親しんだわたしには、清末の譚嗣同・章炳麟から李大釗を経て毛沢東の「革命」にいたる道筋を示された両氏の研究に関して、西氏の場合は並はずれた思弁力を発揮されていたとはいえ、その研究関心が現実（日本社会の現実を含む）と切り離せないものとして示され、その切実さを強く感じさせるものであったのに対して、近藤氏の場合には現実への

関心はストイックなほどに希薄で、あくまで学問世界での「理」の追求に関心が示されたという印象をぬぐえない。

そのうち、岩波書店による『新編原典中国近代思想史』（全8巻、2010~2011）の企画が始動、現代思想史研究会のメンバーの多くが編纂作業にかかわる中で、研究会そのものは2000年代中頃には雲散霧消状態となっていた。旧版、西順蔵編集『原典中国近代思想史』（全6巻、1976～1977）の参加者のうち、近藤氏と野村浩一氏のみ『国家建設と民族自救：国民革命・国共分裂から一致抗日へ』（第5巻、野村浩一、近藤邦康、村田雄二郎責任編集）、『救国と民主：抗日戦争から第二次世界大戦へ』（第6巻、野村浩一、近藤邦康、砂山幸雄責任編集）で編集参加された。このあたりの訳出すべき文の選択には課題が多かった。文革の収束・改革開放後の1980年代にかけて、留学も可能となり、史料の大量公刊もあり、実態把握が可能になり始めると、日本の研究は脱マルクス主義・脱毛沢東思想論化に向かい、大きく変わったのだが、「理」を追う近藤氏自身の考え方にはさほど大きな変化がないように見え、そのため、編集にあたってはしばしば衝突があった。

この仕事を経て、核となる研究会もなく、中国観の分岐も明らかになり、また近藤氏より下の世代になるわたしたちの仕事が忙しくなるにつれ、ふりかえてみると、いつしか氏と疎遠となっていたように思える。ただ、近藤氏は長く中心的メンバーとして貢献された現代中国学会大会においてはおそらくほとんど欠かさず参加され、その時にはお目にかかることになった。記憶をたぐれば、愛知大学名古屋キャンパスで開催された2017年度全国学術大会でお目にかかったのが最後ではなかったか。

もともと近藤氏はその個性において、人とさして群れることがなく、（たとえば一橋大においてそうであったように、西氏や近藤氏と同学の木山英雄氏らとしばしば山登りなどをして）「ともに楽しむ」タイプではなかった。そのなかで忘れられないことがある。わたしが北京大学哲学系の高名な学者、張岱年（中国共産党創設にも関与した哲学者、張申府氏の弟）教授の大学院講義を幸いにも受講することができ、その時の王船山『張子（張横渠）正蒙注』講義ノートを持ち帰っていた。それを聞きつけた近藤氏から、帰国後間もなく、ノートにもとづいて内容を紹介してほしいとのご所望があった。1980年代、改革開放間もない時期、中国古典研究も「禁」がとれたばかりの時代の、マルキスト張岱年氏の解釈は確かに新鮮なものがあつた。東大社研の近藤氏の研究室において、二度ほど紹介することになったが、近藤氏は心底、楽しまれたようにみえた。近藤氏にふさわしい「亦た説ばしからずや」であつたと、わたしもうれしく、よい思い出となっている。

ご親族の話によると、近藤氏は最晩年を送られた高齢者用施設において、突然倒れて救急車搬送される車中で亡くなられたとのこと。その施設においても、近藤氏は同所の人たちに毛沢東について語ることを楽しんでおられたという。わたしは氏がそのように最後を迎えられたことを慰みとしたい。

## ■田中仁先生を偲ぶ

丸田孝志（広島大学）

田中仁先生が今年4月14日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

田中先生と私は歳が10歳離れており、私は広島大学に入学後、研究室のオリエンテーションで院生の方々をご紹介いただいた際に一度お見受けしただけで、その翌年に先生は大阪外国語大学に就職されたため、先生の在学中に親しくお話することはありませんでした。ただ、私は学生時代、大学の美術部に所属し、卒論のテーマに中国共産党史を選択したこともあり、院生の先輩方からは、東洋史研究室と美術部の先輩に田中仁という人がいて、しかも共産党史の専門家であることをよくお伺いしていました。田中先生は、日本画で紫陽花を描かれて県美展に入選されていたということで、その意味でも早くから目標とすべき大先輩でした（同じく研究室と美術部の先輩の笹川裕史先生も入選されたのに対して、私は入選を果たせなかったので、不肖の後輩であることを自ら確認しています）。思い起こすと、その後の長いお付き合いの中で、田中先生と美術や絵の話をするのは、ほとんどありませんでした。ただ、学生時代に描かれた紫陽花の絵を、ずっと後になって先生のホームページで初めて拝見したことがあります。小さな画面越しでは作品の真価は伝わりにくいことを承知で敢えて申し述べれば、過酷な共産党史の世界とは全く異なる、先生のお人柄を偲ばせるような穏やかな光と色に包まれた優しい絵でした。あるいは、それは私の勝手な解釈で、先生が抗日民族統一戦線などの問題で取り組まれたような、中国近現代政治史の様々な可能性の光と重なっているのかもしれませんが。

田中先生と親しくお話ができるようになったのは、私の南開大学留学中に、先生が文部省研究員として中国人民大学に滞在された時からです。博士課程前期進学後半年で、ろくに勉強もせずに中国に留学したばかりの私は、北京や天津でお会いする度に、研究に関する基本的なことから現代中国の政治社会の見方に至るまで、すぎるような思いで教えを乞いました。先生はいつも学生の私と同じ目線に立って、ご自身の経験も交え、ご自身が疑問に思うことも率直に問いかけながら、私の問いに答えて下さいました。先生のお人柄に甘えて、結構弱音を吐いたと思います。また、この時期に先生のご紹介で李良志先生、楊奎松先生ら中国の中共史研究の先生方にも面識を得ることができました。自信のない私に様々な機会を与えながら、折に触れてそれとはなしに励まして下さったことに今更思い当たります。その後もずっと先生は、いつも同じ目線で様々な疑問を私に語りかけて下さいました。

先生は、中国共産党中心の歴史叙述を相対化した中国近現代政治史研究を厳密な実証によって推進される一方で、その関心は常に現代中国の政治や社会を説明できる視点や方法をいかに獲得するかということにあったように思います。そのような問いかけは、時に極めて率直な形で私にも向けられましたし、誰とでも胸襟を開いて対話し、幅広い学術交流を世代を超えて進めようとする熱意は、大阪大学中国文化フォーラムと国際シンポジウム「現代中国と東アジアの新環境」を組織・運営する原動力であったと思います。後から知ったことですが、先生は広島大学時代に原理研究会に対抗するための運動において中心的な役割を果たされていたとのことで、そのような組織者としての抜きんでた才覚も遺憾なく発揮されたのでしょう。地域も研究分野も多岐にわ

たる数十名規模の会議を 13 年に渉って運営された間には、多くのご苦勞があったと推察しますが、ある年の会議で、「いろいろと難しいことがあっても、しっかり話していけば通じるんだよね」という趣旨のことを、納得したご様子で語っておられたことが印象に残っています。2009 年以降、私もこのシンポジウムに毎年欠かさず参加させていただきましたが、その度に、「丸田君、どう思う？」というあの穏やかな問いかけに触れました。対話と組織の合意の手続きを重視し、細かな作業にもご自身が決して手を抜かない丁寧な運営があったからこそ、この会議が長く続き、多くの若手が育っていったのだと思います。

先生の組織された研究課題は、それ以降も、現代中国におけるリスク管理問題、大阪大学石濱文庫所蔵の近代内モンゴル新聞史料『フフ・トグ』（青旗）の整理・データベース化、日中韓台の歴史問題に関する対話など、極めて多岐にわたり、その間、現代中国学会の理事長も務められました。国際シンポジウムが回を重ねて軌道に乗り始めていた頃、先生は 1939 年 11 月の中国共産党第 6 期 6 中全会の終了後から 41 年 1 月の皖南事変発直前の約 800 日を、延安整風運動による毛沢東の権力確立の前段階と位置づけ、前線根拠地、延安、国民党地区、日本占領地区など全中国を視野に入れた権力編成の政治過程の究明を目指されていました。その後、先生のご関心が歴史記憶や現代中国の政治過程に移っていったこともあるかもしれませんが、「800 日」研究の成果は延安、前線根拠地についての論稿の発表の後には、未完になってしまいました。中国文化フォーラムを中心とした幅広いプロジェクトをまとめ上げ、国際交流と後進の育成に専心される中、ご自身の本当にやりたいことの一部を犠牲にされてしまったのではないかと残念に思います。

今年 2 月には、事前録画の形式でオンラインでの研究会で報告された際に、画面越しにお会いすることができました。フローからの質疑にはその場で的確に回答されて、病の中でも弛まず研究を進められる気迫に打たれるとともに、かなりお元気になられたものと安心していました。その後しばらくして、この報告の内容を論文として刊行することについて、メールでご相談を受けましたが、ご病気のことで少し焦っておられるようにも感じられ、諸事情で刊行の目途がつくまで少し時間がかかりそうなので、ゆっくり準備していただきたいという気持ちをお伝えした次第です。そして、4 月初めには刊行の目途がついた旨、短いご報告を受けました。しばらくはご連絡もしないままでしたが、6 月に急なご逝去の報を伺い、言葉を失いました。後に、先生は病を押して 3 月までには原稿を完成されていたことを知りました。

先生が病に倒れられてから、香港の大陸化、パンデミック、ウクライナ戦争と世界が大きく変わる中、先生の問いかけを直接聞くことはできなくなってしまいました。悪意と敵意に満ちた非寛容な対立は先生が最も嫌うもので、晩年は友人や学生らのことを思いながら心を痛められていたと思います。国際情勢は分断と対立の様相を強くしていますが、田中先生の開いた様々な交流と対話の道筋は、確実に次の世代に受け継がれ、新たな実を結ぶものと信じています。私も先生の問いかけに向き合いながら、私なりの対話と交流を続けていきたいと思っています。

## ■事務報告

### □ 2022 ～ 23 年度第 3 回常任理事会議事録

日時： 2023 年 7 月 16 日（日） 9:00-11:15

場所： zoom によるオンライン開催

参加：阿古智子理事長、水羽信男副理事長、家永真幸事務局長、中村みどり会計担当理事、倉田徹関東部会代表、中川涼司関西部会代表、黄英哲東海部会代表、大澤武司西日本部会代表、石塚迅広報委員長、巖善平規約・財政健全化委員、中村元哉年度変更担当理事

欠席：澤田ゆかり編集委員長、加茂具樹規約・財政健全化委員

\*オブザーバー：濱田麻矢 2023 年度神戸大学大会実行委員長、楊秋麗関西部会総務担当理事、吉見崇 NL 担当広報委員

#### 【報告事項】 ※敬称略

##### 1. 会務（家永）

会員動向（2023 年 6 月末現在）：

総数 665 名（退会者 3 名・新規入会者 19 名・再入会者 1 名・新規入会入金待ち 3 名、退会者 4 名）／会費長期未納会員 26 名／住所不明会員 25 名

##### 2. 会計（中村みどり）

会費納入状況についてはおおむね前年度並であること、今後は事務局負担軽減のため振込用紙は学会誌に同封する一方、会費納入依頼状は会員全体宛メールで発出することで納入率の向上を期すこと等が報告された。

##### 3. 編集委員会（家永代理報告）

澤田編集委員長に代わり、家永事務局長より、『現代中国』第 97 号につきページ数コントロールのための対応策について編集委員会でメール審議されたことが報告された。

##### 4. 広報委員会（石塚）

HP は順調に運営されている。ニューズレター第 69 号を 2023 年 6 月付けで発行した。次号は、全国学術大会開催前の 10 月初旬に発行予定。

##### 5. 地域部会（倉田、黄、中川、大澤）

関東部会、関西部会、東海部会、西日本部会の各代表から活動報告があった。詳細は学会 HP およびニューズレターを参照のこと。

##### 6. 渉外関係（家永）

日本学術振興会「育志賞」推薦について、厳密な学会内選考は制度が未整備かつ人力不足のため難しいが、若手奨励には積極的に応募すべきとの観点から、常任理事会で候補者の募集を行った（この選考方法については常任理事会メール審議にて 2023 年 4 月 17 日承認）。結果、推薦

のあった1名について本学会からの推薦者として応募した。今後候補者が多く挙がる場合は、地方部会間で格差が出ないように優先順位をローテーションするなどの対応を考えるべきである旨、事務局長より提案があった。

## **7. DOI取得計画（J-STAGE への参加）進捗状況（家永）**

『現代中国』がオンライン ISSN を取得し、J-STAGE での公開が始まった。2023年6月23日に第96号、7月1日に第95号、94号を公開した。この3号分の経験に基づき、事務局長が作業マニュアルを作成し、大学院生アルバイトさんに順次作業をお願いしていく予定。今期中に作業が完了しなかった分や、PDF化が済んでいない号については、次期以降の執行部に作業引継を申し送る。

### **【審議事項】**

#### **1. 2023年度学術大会準備状況の報告とプログラム案の承認（中川、濱田、楊）**

濱田実行委員長から大会準備状況につき報告がなされた。自由論題・テーマ分科会のプログラム案につき、不採用となった報告について経緯を確認した上で、原案が満場異議なく承認された。今大会では参加費、昼食費、懇親会費を実行委員会が現金で徴収するが、この点について審議を行った。幹事部会・主催校の意向・計画を尊重し、常任理事会として承認した。

#### **2. 2024-25年度の学会業務委託について（事務局）**

中国研究所に引き続き業務委託の継続を依頼すること、具体的な契約内容に関する交渉は理事長に一任することが承認された。ただし、契約内容が大きく変更となりそうな場合は、常任理事会のメール審議にかけることとした。

#### **3. 財務改善策について（事務局）**

会員へのサービスに関し、「会費未納2年で会誌送付を停止する」という措置がとれないか、中国研究所と相談することが承認された。合理的かつ無理なく実施可能と判断された場合、事務局長から常任理事会にメールで報告した上で、実行する。

#### **4. 『現代中国』第97号のページ数削減策について（事務局）**

第97号に関し、会務報告欄と執筆要領を誌面からカットすることは編集委員会ですでに認められたが、事務局長より「経過」欄は残したい旨提案があった。また、第98号以降は第96号以前の構成に戻さず、今回の措置を原則としたい旨提案された。いずれも、最終的には編集委員会で承認していただく必要があるが、常任理事会としては承認することが確認された。なお、これまで誌面に掲載していた会費長期未納会員、住所不定会員のリストについては、学会誌やニューズレターには掲載して周知する方法も検討されたが、それはせずに、総会、全国理事会、常任理事会で映写することで情報提供を呼びかけていくこととした。

#### **5. 第98号以降の学会誌ページ数コントロールについて（事務局）**

オンライン版発行開始にともない、学会誌の一部ないし全体を「紙では出さないがPDFでは

出す」ということが可能になった。全面オンライン化は先の全国理事会で反対意見が多かったことから、今すぐ導入すべきではないが、業務委託契約内容との兼ね合いで、ページ数を圧縮しなければいけない状況は今後たびたび発生することが見込まれる。

そこで、第 98 号以降の学会誌では次のような変更を行うことが事務局から提案され、常任理事会の意向として編集委員会に検討を依頼することが承認された（期を跨ぐため、澤田編集委員長に募集要領の改訂をお願いし、実際の編集作業は次期委員会に申し送ることになる）。

- ①書評は編集委員会の判断で PDF 版（オンライン版）のみの発行となる可能性があることを、事前に募集要領で断った上で、執筆者に依頼する。
- ②紙版での特集の掲載は原則として 1 号につき 1 企画、大会共通論題を活字化したもののみとする。それ以外の特集を組む場合は、下記 6 で提案するオンライン版「特集号」での発行とする（ただし、紙版のページ数が足りない場合など、編集委員会の判断で例外的に 2 つ目以降の特集を企画・編集・掲載することは妨げない）。

## 6. 今後の「別冊」や「特集号」の扱いについて（事務局）

第 98 号以降の課題として、今後は 2022 年度に発行された「別冊」のように、PDF 版のみ発行の特集を『現代中国』の一部として J-STAGE に掲載することも可能になる。どのような企画が、どのような条件を満たせば『現代中国』の別冊（特集号）を名乗ってよいのかについては、今後は公平性のためルールを作る必要がある。

最終的には第 98 号の応募要領確定の際に編集委員会で審議・承認・反映させていただく必要があるが、四役（理事長・副理事長・会計担当理事・事務局長）からの以下の提案がなされ、常任理事会の意向として編集委員会に実施の検討を依頼することが承認された。

- ・全国大会でのテーマ分科会に基づく特集であること（特集論文 2 本以上＋コメンテーター発言稿等からなるものとする）
- ・投稿者は、学会誌に準じたデザインになるよう、編集委員会指定の書式で版下を作成すること。
- ・費用は原則として投稿者（団体）の自弁とし、学会からは一切の補助を行わない。
- ・投稿者がこれを承諾し、かつ編集委員会が企画を承認した場合のみ、『現代中国』別冊として PDF 版を発行し、J-STAGE に掲載する。巻号は、編集中の号の巻号の特集という扱いとする（次号なら 2024 巻 98 号の特集、または 2024 巻の特集号とする）。
- ・この『別冊』（特集号）の発行は、原則として 1 年度につき 1 特集までとするが、その縛りが合理的かどうかについては継続審議とする。
- ・編集委員会には、投稿募集の際に本企画についても明記してもらう。

## 7. 現在公開中の「別冊」の J-STAGE 上での扱いについて（事務局）

現在公開中の『別冊』を「2022 年特集号」と見なし、J-STAGE 上で公開することが承認された。編集委員会に報告後、事務局長が公開作業を行う。

## 8. 学会 HP リニューアル計画について（事務局）

継続審議中であった HP リニューアル計画について、四役より、来年 2024 年度予算に立項すること、理事長から各地方部会混成で web 関係に詳しい会員数人から成るプロジェクトチーム結成を依頼し、今年度中から実質的な作業（業者選定、仕様や費用に関する交渉）を開始することが提案され、異議なく承認された。完成は次期執行部への引き継ぎ後になる見込み。

## 9. 入会申請書フォームの微修正について（事務局）

入会申請書フォームの微修正が提案され、承認された。

## 10. 全国大会幹事校と開催月の確認

2024 年度（関東部会）法政大学（福田円理事） ※ 10 月開催予定

2025 年度（東海部会）未定 ※この大会以降、5 月開催（総会、全国理事会同日開催）

2026 年度（関東部会）未定

※関西・東海・西日本部会は、奇数年の全国大会を「関西（23）→東海（25）→関西（27）→西日本（29）→関西（31）……」の順に担当する。

## 11. 2022-23 年度第 4 回常任理事会（最終回）の日程調整

3 月上旬中旬の週末にオンラインで開催する。後日メールで日程調整を行う。主な議題は次々回（法政大学）大会の共通論題の承認、自由論題・テーマ分科会募集要領の確認、次期への引継事項の確認ほか。

### ■日本現代中国学会事務局あて寄贈図書

栄剣著（石井知章・阿古智子・麻生晴一郎・及川淳子監訳）『現代中国の精神史的考察—繁栄のなかの危機』白水社

=====

日本現代中国学会事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18

一般社団法人 中国研究所内 日本現代中国学会事務局

TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039

EMAIL c-genchu[アットマーク]tcn-catv.ne.jp

郵便振替：東京00190-6-155984

広報委員長：石塚迅（山梨大学）

ニューズレター編集：吉見崇（東京経済大学）

日本現代中国学会HP：<http://www.genchugakkai.com>

=====